



卓 話

「教育・研究図書有効活用 プロジェクトについて」

(財)日本科学協会/図書プロジェクト室

顧 文 君 氏

「知識から理解へ、
理解から信頼へ」

「知彼知己、百戦百勝」(敵
を知り己を知っていれば、何度
戦っても勝つ)という名句が中



国の「孫子兵法」の中にあり、かつては、いくさの
作戦としてよく用いられ、現在では、経営戦略にも
用いられているが、国際交流や国家間の相互理解の
面においても通用することであると考える。

現在、日中間に起っている摩擦の根源は、互い
に相手を知らない、いや、自分のことさえ明確には
知っていないというところにあるのではないかと考
える。従って、両国間の摩擦を解消するには、ま
ず、相手を知ることが第一であると言える。

こうした考えに基づき、当会が日本財団の助成を
得て1999年から実施している「教育・研究図書有効
活用プロジェクト」は、日本で収集した図書を海外
の大学・研究機関に寄贈することにより、寄贈先の
教育・研究をサポートすると同時に互いに相手国を
知り、理解し合う事業である。

現在のところ、大学院、大学、短大、高等専門学
校などの高等教育機関における日本語学習者数が世
界で最も多い中国の24の大学図書館に寄贈対象を
絞って実施しているが、2006年4月までに約147万冊
の図書を寄贈した。高等教育機関における日本語学
習者数が38万人、日本語専攻を設置している大学が
350以上にも達する中国において、147万冊は微々た
る数であり、大海原に投じた一滴の甘露のようなも
のである。こうした中では、その甘みを味わうこと
は困難であるが、まず、踏み出さなければ、何も始
まらないのである。「千里の道も一歩から」であ
り、「ちりも積もれば山となる」である。少しずつ
でも始めて継続すれば、必ずその効果は出てくると
確信している。

こうした効果を最大限に発揮させるため、様々な
工夫が日中両国においてなされている。中国では図
書館担当者が、寄贈図書の新着情報や書誌情報の周
知などの広報活動により活用率の向上を図るととも
に、日本語図書の利用に関する講習会の開催などの
啓発活動により寄贈図書の効率的な活用を図ってい
る。また、日本では中国の活用者の「生の声」や活
用現場の写真を収集してホームページ等で公開し、
経過報告として図書提供者に還元するとともにプロ
ジェクトを周知することにより、図書寄贈意欲の高
揚と中国に対する理解の深化を図っている。

まず、図書を通じて日本認知、そこから日本理
解、最終的には信頼関係の構築を目標とするこのプ
ロジェクトは、「知識から理解へ」、「理解から信
頼へ」をモットーに図書寄贈を実施してきたが、目
標達成のための新たな事業として2004年に中国ハ
ルピン市で「笹川杯日本知識クイズ大会」を立ち上
げた。2005年以降は黒龍江省と華東地域の2地域に拡大
して開催してきたが、日中両国において大きな反響
を得ている。

「日本知識クイズ大会」とは、日本に関する知識
を日本語で競う大学対抗のクイズ大会で、各大学か
ら3名ずつ選抜された代表選手により白熱した戦いが
例年繰り広げられている。日本に関する広範な知識
と深い理解を要するこの「大会」に参加するため、
選手たちは沢山の本を読んで知識を吸収すること、
知識を消化して理解を深めることが求められる。ま
た、選手が正解することができない場合には、応援
団などの会場の観客にも回答するチャンスが与えら
れており、観客も選手同様に参戦者として「大会」
に臨んでいる。約500名の観客が見守る中、1時間半
の所要時間内に60問程度の問題が出題されるのだ
が、「大会」は、日本に関する知識・情報を短時間
に多くの学生に印象付けることのできる効率的な催
しであると考えられる。

ただ、知識の蓄積、即、理解の深化、信頼関係の
構築というほど単純ではなく、「クイズ大会」だけ
では到達困難な最終目標に接近するため、「大会優
勝者」の日本招聘を併せて実施している。具体的な
内容としては視察・見学、ホームステイ、意見交換
などを挙げるができるが、招聘後の学生達の感

想文や帰国報告会などからも日本理解の深化と日中友好意識の涵養に関して大きな手ごたえを感じている。

以上のように、教育・研究図書有効活用プロジェクトは、「知識から理解へ」、「理解から信頼へ」をモットーに最終目標に向かって図書寄贈事業を軸に多角的な事業を展開してきた。

図書寄贈には8年間で147万冊という実績はあるが、最も求める成果というのは個々の学生・教員の中で育まれているものと考えている。この成果が表れるまでの期間は長く、且つ、見えにくいものであるが、ほぼ永久保存に近い形で管理されている寄贈図書は、ゆっくり、ひそかに学生・教員をバック・アップ

し続けるのである。中国の古典に「十年樹木、百年樹人」（木を育てるには十年、人を育てるには百年）とあるように、将来を見据える時、日中関係を担う若者の日本に対する理解の深化、両国間の信頼関係の構築は必要不可欠であり、図書寄贈を始めとしたこのプロジェクトが果たす役割は大きいと考える。

最後になりますが、図書の寄贈でも、「クイズ大会」や「クイズ大会優勝者招聘」への協賛でも、或いは、ご意見・ご提案でも、当協会が実施しているプロジェクトに何らかの形でご参加いただければ、有難く存じます。